

国民のコトバ

第二回「幻聴妄想」なことば

高橋源一郎
Takahashi Genichiro

本の時間:12:01:040

お正月も近い。お正月とことば、といえ、やっぱり「かるた」ではないか。ひとりの日本国民としては、そう思うのである。

でも、ふつうの「かるた」じゃ、あんまりおもしろくない。そこで、今回は、「幻聴妄想かるた」という「かるた」について、みなさんにお伝えしていきたいと思う。

これは、どういう「かるた」というと、ハーモニイという、「こころの病」をもった人たちが通う施設で作られたものだ(出典は、『幻聴妄想かるた』医学書院)。その人たちが、日々出会う「幻聴」さんや「妄想」さんを、丁寧に集めて、「かるた」の形にしたものなのである。

確かに、「こころの病」をもった人たちが、ふだん考えたり、感じたりしていることは、「こころの病」をもっていない人たちのそれとはちがう……とここまで書いて、「はて？」と、ぼくは思ってしまったね。わかってい

て、ギャンブルが止められない人(正直に告白しますが、それ、ぼくです)、あれは、ギャンブル依存症という、立派な「こころの病」だし、ぼくの知り合いには、いうことの半分はウソという人がいて、そればかりか、ウソばかりついているうちに、ウソじゃなくてほんとのことと思いきみはじめる人もいる。それだって、どう考えても、「こころの病」でしょ。っていうか、他人の話を絶対に聞かない、朝生あさなまの出演者たち、あの人たちは、揃いも揃って「こころの病」じゃないんだろうか……。

いや。そんなことをいいますと、「こころの病」をもっていない人なんか、いなくなっちゃいそうだから、本日は、誰にでもわかる、お墨付きの「こころの病」所有者たちのことばを紹介することにした。

もしかしたら、そのようなことばを、これから読むことになるみなさんは、とまどいを感じるかもしれない。ふだ

ん、みなさんが、読んだり聞いたりしていることばとは、若干、調子が異なっているからである。とはいっても、十九パーセントは(九十七パーセントぐらいかも)、同じことばなのだ。ぼくは、そちらの方が重要ではないかと考えているのだ。

小学生が、おとなと共有することばは、七十パーセント(五十パーセント?)ぐらいかもしれないし、うちの次男(五歳)になると、一気に、二十五パーセント以下に下がってしまうかもしれない。それが、アメリカ人だとすると、いったいどうなるのか。おとな同士なら百パーセントわかりあえるといえるかもしれないし、そもそも、外国語だから、アイ・ラブ・ユーぐらいしかわからない、わかってもせいぜい二パーセントだよ、という人だっているかもしれない。

ぼくは、鎌倉で土方をやっていた頃、青森からやって来られた農民の人たちと初めて一緒に作業したが、彼らがお互いに話していることばがなにひとつわからなかった。○パーセント!

フランス語や中国語なら、まだ「音」がわかる。それさえわからない。わかったのは、みんな気持ちよさをそうに話

していたことだけだった。

それでいいのである。

そもそも、ことばを通じて百パーセントお互いに理解し合うなんてことはありえないのだ。おそらく、この国に住む人びとの間においてもまた。「日本語」とは、この国で用いられる、たくさんの「日本語みたいなコトバ」の集まりなのではないだろうか。

それは、ともかく。とりあえず、ランダムに「かるた」を読んでいくとしようね。

① 二の間に ご飯の食べ方がわからなくなった

すごい、と思いませんか。ご飯の食べ方がわからなくなるなんて。認知症がひどくなった老人だって、「食べ方が汚くなった!」とか「ご飯を食べたのを忘れて、何度でも食べる!」という程度だ。しかも、このように呟いている「こころの病」をもっている人は、認知症の老人とちがって、元気いっぱいだし、ふつうに(微妙にちがうかもしれないけど)しゃべったりしているのである。ただ、ピンポイントで、なにかがドカンと欠落しているだけなのだ。た

だ、それが、ご飯の食べ方だった、というわけである。たぶん、この人は、目の前の食卓に置かれた、ご飯をよそったお碗を見て、困惑していたのではないか。ぼくの、何人か前の奥さん……と平気で書く時点で、ぼくもふつうではないかも……も、よく、ご飯の入ったお碗を見て、呆然としていた。ぼくが「なにしているの？」と訊ねると、その奥さんは、「米粒って、ちいさい虫みたい！」と真面目な顔で答えた。「なるほど」とぼくは答えた。おかげで、しばらく、気持ち悪くって、ご飯が食べられませんでした。

思うに、「こころの病」をもっている人は、実はたいへん繊細だったり、ものごとを真剣に考えすぎているのではないだろうか。「これは、なんだ、この白いもの？」とか「どうして、何回も噛まなきゃならないんだ、顎が疲れちゃう」とか「どうして、こんな細い棒を使って、口に運ぼうとするんだろう。スプーンですくう方がずっと速いじゃないか」とか考えてしまい、ついには、手が出なくなってしまう。なにも考えずに、出されたものを、ぼくはく食べるぼくたちの方が、おかしいのかもしれない。

③ コンビニに入るとみんな友達だった

すごい偶然……なのではない。これだけ読むと、みんな友達でハッピーじゃないかと思うかもしれないが、そういうわけでもない。この句を詠んだ方は、この頃、ある友達にストリーキングされている、という「妄想」さんに悩まされていた。いつも、その友達が、つきまとっている（ような気がしてならない）。会わなきゃいいけどと思っている時、コンビニに入ったら、そこにいた全員が友達に見えたのだ。びっくりしたそうである。そりゃ、そうだよ。さぞや、怖かっただろう。

④ おとうとを犬にしてみました

この人は、とにかく、弟さんが犬に見えて、自分の左側をずっと歩かせてしまったらしい。でも、ふだんは、ちゃんと、弟さんが人間であることはわかっているのだから、これは、例外的な事件であることは、当人の名譽のためにも、記しておきたい。ぼくが感心したのは、その人に、犬であると思われて、いわれたままに左側を歩いてくれた弟さんだ。なんて優しい人なんだろう。

⑤ にわとりになった弟と親父

おとうとを犬にしてみましたとは、別の人のようだ。説明しよう。っていっても、そのまんまです。ある日、家にいて、父親と弟を見ると、ふたりともにわとりになっていた。それだけ。実に淡々としている。その時、その人は、どう思ったのか。なにを感じたのか。ぜひ訊いてみたい。「ふーん」と思ったただけなのだろうか。カフカという人は、朝、起きたら、「虫」になっている人のことを小説に書いた。こっちは、「にわとり」で、しかも、二羽だ。インパクトとしては、カフカ以上ではないだろうか。小説に書いたら、傑作になった可能性が大だ。待てよ、もしかしたら、カフカも、「こころの病」をもった人だったのだろうか。

ルポードトップフォーティ

⑥ トップの曲 僕が作りまし

⑦ 普通妄想だと思っでしょ 本当だよ

いろいろな意味で驚嘆すべき「かるた」だ。だいたい、「かるた」としては長すぎる。それはともかく、この「かるた」を作った人は、ただの人じゃない（そりゃ、そうですね）。「幻聴」さんや「妄想」さんに悩まされながら、日々、作曲に励んでいたのである。ところが、ある日、ラ

ジオに耳をかたむけていて、びっくりした。「ビルボードトップフォーティ」のトップの曲が、自分が作曲したものであったのである。そりゃ、びっくりするでしょう、ふつう。知らないうちにレコーディングされていたんですから。ぼくの知る限り、日本人作曲家の曲が、ビルボードのトップを飾るのは史上初だと思う。以来、アメリカのレコード会社から、ギャラではなく、女を送ってくるのだそうだ。うらやましい。実は、ここまで書いたのは、ささいなことでも、なんといっても、この「かるた」で素晴らしいのは、「普通妄想だと思っでしょ」という切り返しだ。この人は、ぼくたち（正常であるとなんとなく信じている人）の心の中を読みとることができるといい。「普通妄想だと思っでしょ」という人が、「妄想」の世界にいるとは思えない。というか、ふつうの人よりずっとユーモアを理解しているのではないかと思う。

⑧ まい日 金縛り状態

金縛り状態自体は、誰にでもある。それが毎日というから、たいへんだ。睡眠のリズムが乱れて、とても辛いそうです。

み な殺しにされる日が特定され
逃げ回ったがまだ生きています

なんと恐ろしいことだろう。身震いする。「幻聴」さんや「妄想」さんは、「殺す日」まで特定するんだそう。この人は、ほんとうに怖かったと述懐している。でも、なぜか、生き延びてしまった。それが不思議だ。もしかしたら、それは、「幻聴」さんや「妄想」さんの、単なる「脅し」なのかもしれない。そうやって、この人を恐怖のどん底に追いこみ、それを楽しむ。だとすると、「幻聴」さんや「妄想」さんは、かなり悪い性格の持ち主にちがいない。

も う気になるとそこから意識が離れない

いや、これ、ぜんぜんふつうだと思っただが。

ふ いに空から声がして

ふ 「三越の前で待っている 歩いて来い」
1日待ったが誰も来なかった

この人の場合、家で寝ていると、ささやくような声で、いろいろと聞こえてくるらしい。ふつうの人なら、「テレ

駅構内から江ノ島電鉄の改札口へ直接行きます。ほんとうに惜しかった。それとも、「幻聴」さんは、わざと、隣の駅で声をかけたのだろうか。とにかく、この時も、「待っています」「ついて来い」といわれ、江ノ島まで歩いていったのだ。「待っています」ということは、江ノ島にいるということ、つまり「行って行く」ことなんかできないと思うのだけど、そのあたりまで考えは及ばなかったのだろう。それにしても、この「幻聴」さんは、この人を、遠距離歩かせようとしているようだ。目的は何なのだろう。体力強化を目指してなら、いいのだが。それにです、この次、「トリポリで待っている」とか「北極点で待っている」といわれたら、やはり、歩いて行こうとするのだろうか。それが心配だ。くれぐれも、「幻聴」さんには、これ以上無茶な指令はしないでほしいと思う。

え ん慮なくフェラーリで待ち伏せ

え 「彼と付き合っているのは私」
ハーモニニーの皆は全員知っている

この人は「押し強い美しい女性」から思いを寄せられている。嬉しいけれど、でも、少々困っている。わかる

ビかな？」とか思うところだが、この人は、すぐに信じしてしまう。信じやすい人なんだ。というか、ものすごく素直な人なのかも。きっと、電話がかかってきて「おれだけど、会社の金を使いこんじゃって、いますぐ埋め合わせをしなきゃ、クビになるんだよ」といわれたら「わかった。口座番号を教えてください、すぐに振り込んであげるから」というにちがいない。それにしても、不思議なことがいくつもある。待ち合わせに誰が来るのかわからないのはいいとして、「歩いて来い」という指令に疑問は感じなかったのだろうか。あと、待ち合わせの時は、携帯電話を持っていった方がいいと思うんだが。それから、一日待ったのはえらいと思う。ほくは三時間待ったことがあるけど、そのあたりが限界だ。

や はりかすかな声

や 「待っています」「ついて来い」
五反田から江ノ島まで歩いてしまう

三越の前で一日待った人が、別の時に、空から聞いた声だ。この時は、五反田駅にいたらしい。隣の大崎駅からなら、湘南新宿ラインで鎌倉まで直行だったのだ。あとは、

ような気がする。なぜかっていうと、その女性は、フェラーリに乗って、このハーモニニーという施設にやって来て、みんなに「私、彼と付き合っているのよ！」と吹聴するからだ。きっと、他の女の子に、この人をとられたくないから、そのように主張するんだろう。目に見えるようだが、でも、問題が一つある。ハーモニニーの皆は誰も、その女性を見たことがないのである。どうしてだろう。ほんとに不思議だ。もしかしたら、みんな、イカれてるんだろうか（すいません、確かに、みんな、「こころの病」をもっていい人だった）。それとも、その人に嫉妬して、知らんぷりをしているのだろうか。どちらだと思えます、みなさん？「ハーモニニーの皆は全員知っている」というのは、「妄想」の疑いが濃厚である。

つ まのブルーのホルシェが迎えにくる

つ 半日待ったがやっけない図書館前

フェラーリに乗った女性に待ち伏せされた人が、今度は、奥さんのホルシェを待っていて、待ちぼうけをくわされたそりゃさうだろう。奥さんだって怒る。浮気者め！ところで、この時は、ハーモニニーの職員の人、一緒に待って

いたそうだ。半日、待ったのだろうか。お疲れさまである。でも、江ノ島まで歩くよりは、だいぶ楽だろう。そんな気がする。

むりやり私は天皇にされるところだった

この人は幼少期から自分の家系が天皇家と関係があると聞いて育ったそうだ。そのせいなのか、ついには、天皇になるよう迫られ逃げ回るはめになったとか。逃げたい気持ちがよくわかる。どこに、天皇になりたいなんて思う人がいるだろう。仕事は多いし、プライベートはないに等しいし。女の子をナンパすることも、酔っぱらって西麻布の交差点を四つん這いになって歩く自由もない（江國香織さんのことをいっているのではない）そういう人生はイヤだ。もしかしたら、いまの天皇陛下も、皇太子様も、ここらの底では、天皇になんかなりたくないと思っている（いた）かもしれない……という考えをしよう、今日このごろだ。

しん臓が止まっている

それって、死んでることじゃないのだろうか。この人も、ほんとうに驚いたと思う。いや、死んでいるからな

そこから抜け出したいと思うのも無理はない。でも、考えようによっては、ものすごく豊かな感覚ではないか。どこもかしこも故郷……。悪くないかも。それにしても、ですが、佐賀・長崎・徳之島、という選択に、なにか秘密があるのだろうか。世界が全部、佐賀・長崎・徳之島としたら……それは、イヤかも。

のうのなかに機械がうめこまれしっちゃかめっちゃかだ

この人の脳の中には、機械が埋めこまれていて、考えていることが全部、外部に筒抜けなんだそうです。まあ、それはいいとして、その情報を知った人たちが、自分の周りで、ひそひそそのことについて話していることだけは我慢ができない、ということらしい。それも、まあよくあることじゃないですか。たぶん。でも、この「かるた」には続きがあるんですね。

しん宿の女番長がそんなことは話しちゃいけないと言ってくれる

機械が埋めこまれていることはお話ししました。ところ

にも感じなかったのか。説明を読んでもみると、落ち着きがなくなった時、第六感が働いて、こういう状態になるのだそう。なんでも、お尻の穴が閉まり、咽頭がなくなり、尿管もなくなり、皮膚の感覚もなくなり、最終的に心臓も止まってしまうのだとか。いったい、どういう感じなんだろう。なんか楽しい気もするけど。LSDでトリップすると、こんな感じになると読んだことがある。だとすると、薬の助けがなくてもトリップできるこの人が、ちょっとうらやましいかも。いや、心臓が止まっている感じなんか味わいたくないような気もするしなあ。かなりビミョー。

さ賀、長崎、徳之島この世界から抜け出せない

この感覚は、ほんとにすごいのではないか。ひとことというのと、どの土地に行っても、関係があるような気がする、というか宿命的に結びついているような気がする、とこの人はいっているのである。初めての場所に行っても、なんか初めてじゃない気がする。まるでタイムマシンに乗って戻って来た、というか、そんな感じだ。確かに、新鮮さもない、どんな場所でも既視感ばりばりだとしたら、

が、「新宿の女番長」という人がいて、その人は、さっきの人のプライベートを侵害している人たちが次々に捕まえては「人の頭の中のことをとやかく言うな！」と注意してくれているらしいのだ。「妄想」さんや「幻聴」さんの中には、味方もいるということ。よかった。

ここまで読んでいただいたみなさん、どのような感想をお持ちになっただろうか。「このころの病」をもっているというから、どんな、想像を絶することをいうのかと思ったり意外に「ふつう」と思われたかもしれない。茶目っ気があるなあ、と感じられた読者もいるかも。というか、ユーモアなんてものが発生する（脳内の）箇所は、実は「このころの病」が発生する箇所（すぐそばなのかも、とか。

ぼくたちが、ぼくたちが「ふつう」だと思いいこんでいる「脳内」の世界のスタンダードによって生きているように、「このころの病」をもっている人たちも、それぞれに、その世界のスタンダードによって生きているのである。まったく同じだ。というか、ぼくたちの世界より、もっとカラフルで波瀾万丈にも見える。

「かるた」も楽しいけれど、直接、「このころの病」をもっているみなさんの話を聞いた方が、もっと楽しいと思う。そこで、ここからは、病気のみなさんがしゃべる声に耳をかたむけることにしてください。それを、ハーモニーでは「HISTORY」と呼んでいる。「このころの病」をもった人たち、それぞれの「歴史」である。最初に書いてあるのは名前（仮名）ですので、よろしく。

「人心愛（ひとごころあい）」

病名は統合失調症です。発症してからもう6年、46歳のときです。いまはやっぱり疲れるので、家で横になったり好きな本を読んだりしています。ハーモニーは、保健師さんからの紹介です。ハーモニーって、皆いろいろと教えてくれて社会復帰をしていくところのようです。同じような病気でお友達がいなくて、生活保護を受けている人達だとかが生活の面で安心できて、そして社会に戻っていきけるように訓練したいという人たちが集まってきているんだなあと思いました。（中略）

就職してからは毎日疲れていました。仕事はよくやって

分がなってみて、この病の人々は悪いことをするっていう感じじゃないんです。そういうことはなく、ふつうで、だからむしろ、自分自身を傷つけるほうが多いんですね。だから、この病の人は何かをしてしまう、するんだというようにキチガイに刃物という見方はちょっと違うと思います。精神病者だから何をやるかわからないという見方だけはしてほしくないと思います」

「後藤あゆみ」

統合失調症ですね。ちょっと前までは、分裂病ですね。僕の場合、ちょっと変わった診断が最近出ている。体現性の統合失調症といって、体に現れる性格の統合失調症と言われていて、肩とか背中とか頭が痛くて、そういうのが多くて。あとは、ふつうに近いようなタイプの統合失調症です。計算しないとわからないんだけど、ざっと20年くらいこの病と付き合っている。（中略）

父が亡くなったその晩から眠れなくなって、いやあお父さん、ずいぶん自分を守ってくれてたんだなあ心配をかけてたんだなあということがわかってきた。けれども、ま

いたんですけど、よく疲れていた。肉体的にも、一般事務ということもあり、疲れて……、周りに男性が多かったということも疲れを増した。ちゃんとした仕事についていれば、同期に女の子がいたと思うけれど。あるとき、会社のなかで自分が考えていたことが、上司から言われたことと同じで、どうして自分の考えていることがわかるんだろう、盗聴されているんじゃないかと思ったことがあったんです。これが不思議なことのはじまりで、それから仕事をいろいろと変わったんですけど、そんなことがときどきありました。それで具合が一番悪かったのは、猫を見たんですよね。家のなかによくゴキブリが出たんですけど……。ドアが少し開いていて、そこに黒いものがあつたんで、ゴキブリかと思ったら猫の顔だったんです。猫かと思って、猫だ猫だと騒いだら母から『いるはずがない』と言われた。でも何だか、猫を見たんです。それから、一番苦しかったときは、やっぱり何か監禁されたようなときがあつて、この街から出られなくなって、何もさせないって……。そんな感じで村八分にされてつらかった。これが幻聴・妄想だったと言われても、何だかそうだったんですから。（中略）

私自身、この病に偏見をもっていましたけど、本当に自

まりのつかない状態になりはじめちゃって、正直言って、その頃暴力とか、家のなかで壁に当たったりした。暴力で自分も周囲も、精神病かどうかよくわからなくて、お寺さんに相談したりしてしばらく効果はあつた。しかし、そのうちまた合わなくなって、自分で考えてみて、あつてこれは頭がおかしいぞ、変だぞと本気で思うようになってきちゃって、家族が近所の医者に行き、『そのぐらい悪いんじゃない、もう入院だね』ということになった。

連れて行かれる形にはなりませんでしたけど、その際の意味決定は自分でしました。

それは精神病を自分で治そうと思ったからです。（中略）ところで『幻聴妄想かるた』を読んでもくださった方々に理解していただきたいことは、単純に精神病だからといってふつうの人と変わりがあつたわけではないということ。犯罪でも凶悪犯罪は精神病の人というイメージが蔓延しやすと思う。しかし、それは逆だと言ってもいいくらい。たまに怒ったりすることもあつたけれども、おとなしかったり真面目だったりする人が多いんです」

「亜礼木小僧（あるきこぞう）」

53歳、うつ病です。いまは、生活保護でやっと食べられるくらいかな。平日はずっとハーモニーに来て、お昼を食べている。土日は友達のうちに行って一緒に過ごしていることが多いね。その人と一緒に牛丼食べに行ったりする。牛丼はね、三軒茶屋の店が一番おいしい。ハーモニーって僕の生活の一部ですね。ハーモニーはまあ、同じ病気をもらった人間ばかりだからいろいろ話しても聞いてくれるし、新澤さんも親身になって聞いてくれるし、応答してくれますから。そういった意味で僕の一部になっています。(中略)

大きな苦勞、絶不調がやってきたのは、女です。2人を好きになって二股かけちゃって、それがばれて。それで、狂っちゃって結婚しようかと思っていた頃だったんです。1人の女から「死んでやる」とか。僕が「そんなこと言うなよ」とか言ったんだけど。その女が傷害してきて、男を使ってきたり、若松組を使ってきたり、電話攻撃、押し寄せてきたりしました。それでまた、最近若松組が復活してきて……。27歳くらいでした。で、狂っちゃった。振り返ってみると若松組を予感させる出来事だった。(中略)

ぼい、と感じるのだ。

この人たちは、確かに、「幻聴」さんや「妄想」さんに悩まされている。でも、そのことを知っていて、なんとか付き合おうとしている。同時に、「幻聴」さんや「妄想」さんを理解できない「ふつう」の人たちとも付き合い合えればいいな、と思っている。みんな、繊細で、優しい。自分が弱いこと、自分が多くの他人とちがうことを、よく知っているのである。

逆にですよ、赤い丸が描かれた白い旗に向かって敬礼したりしている人がいるけど、変じゃないんだろうか。だって、あれ、ただの布でしょう。お尻が痛くなるのを我慢して、朝から夕方まで、椅子に座って、黒板に書かれた文字をノートに写しているのは、おかしくないのだろうか。そ

入院したきっかけは、さっき話した二股女のことかきっかけて、若松組が出てきて幻聴・妄想が出てきたんですよ。若松組は床を揺らす以外にも口で言ってくる。換気扇から「仕事するな」とか「女がいるだろう」「女が淋しがるぞ」とか話しかけてくる。それで、日善病院(仮名)に入院になった。病院生活は特に不自由なく過ごせた。それから、松沢病院に入院して、中部センターで訓練して、アルバイトしてお金を貯めて、退院していまのアパートに住むようになった。アルバイトはオーコック(仮名)の肉屋で働いていた。(中略)

それで親友から紹介してもらって、新澤さんと話をして、じゃあうちに来なよっていうんで、ハーモニーに来たんです。ハーモニーはいろいろやることになって変わっていくところが面白い。まあ、このかるた、気持ちがあればいろんな人に使ってほしいし、そして、ヒストリーを全部読んでもらって、僕らも同じ人間だということをわかってもらえるといいんだけど……」

ここに出てくる人たちは、みんな、ぼくたちと同じ人間だ。ぼくは、そう感じる。いや、ぼくたち以上に、人間っ

んな場所(学校ですが)に、無理矢理、子どもを追いやるなんて、児童虐待じゃないのか。何十万人もの人たちが住めないような大事故を起こした機械を、また作るうとしたり、そんな危ない機械をよその国に輸出しようとするなんて、イカレてるんじゃないだろうか。こういう人たちがこそ、実は、ものすごい「幻聴」さんや、「妄想」さんに、年中、なにかを吹きこまれているのではないだろうか。困ったことに、そっちの人たちは、それが「幻聴」さんや「妄想」さんの声や姿だということに気づいていないのだ。

はっきりいって、ぼくは、「幻聴妄想かるた」の製作者のみなさんの方が、まともだと思えますね。マジで。

(以下次号)

本の時間の本
HONNOJI BOOKS

警察の未来を賭けた「特命」チーム、始動!

警視庁FIC



今野 敏



毎日新聞社

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
http://books.mainichi.co.jp/

地域部勤務の警察官に下った特命「警視庁FIC」フィルム・コミッション」室。
警備についた映画ロケ現場で発見された謎の変死体。そこには組織をも巻き込んだ壮大な企てがあった!

定価1680円(税別)
978-4-420-10766-0